

心の中に生きる終戦前後の京大経済学部

羅 吉 焯

掲載に当たって

台湾の羅吉焯氏の回想記を資料として掲載するに当たり、ご本人の紹介と掲載の事情を説明いたします。

羅吉焯氏は1924年11月9日日本統治下の台湾新竹県関西に生まれた。台北市の私立国民中学校（五年生）を卒業の後、本文にあるように旧制山口高等学校、京都大学と進まれた。1946年2月GHQの勸告により、一時帰国の予定で休学し帰台したが、交通遮断のため再来日できず、台湾大学に転校し同大学を卒業された。後、1979年ある事情で閑職にあった羅氏は京大大学院経済学研究科への進学を試み、かつての指導教官であった中谷実名誉教授の援助を得たが、技術的な事情のために実現できなかった。

台大卒業後台湾工商銀行に就職し、その後第一商業銀行副総経理（副頭取）、高雄市銀行副頭取、中国輸出入銀行総経理、彰化商業銀行董事長（会長）、大衆票券金融公司董事長、等銀行金融界の要職を歴任された。現在は民間財団法人のシンクタンク、台湾綜合研究院董事長をつとめておられる。銀行では主に銀行業務の企画推進、特に国際部門をながら担当され、各銀行の海外支店開設や国際金融業務で手腕を発揮される一方、また日本と台湾の民間交流のパイプであるアジア・オープンフォーラムでも活躍された。

羅氏は8年前に再建された京都大学台湾同窓会（約100名参加）の副会長を勤めておられる。ちなみに、同会長は許敏恵（中日文化経済協会会長 法学部中退）氏、同名誉会長は李登輝（前総統、農学部中退）氏である。羅氏は本経済学部教官や学生が台湾において調査研究おこなう時に、常に多大の援助を惜しまれない。羅氏の敗戦前後の体験は本学にとって貴重な記録であるので、氏に依頼してまとめていただき、今回掲載させていただくことができた。

（京都大学大学院経済学研究科教授 堀和生）

まえがき

旧制山口高等学校文科二組甲（戦争末期、一組の選修は外国語ではなくて日本古典）を昭和20年3月に卒業して、志望した京都帝国大学経済学部に進学したが、私独りだけが台湾の出身であった。文科生は当時徴兵猶予の特典が停止され、高校卒業の同級生の中には3名、長崎医大を志望して入学したが、私の良き友人で今日も親しく付き合っている吉見 勉君だけが入学の前日に赤紙の召集令状が届いて入営したので、

命拾いした。

その他の同級生で長崎医大を選んだ者は皆原爆の犠牲になったから、人間の運命は本当に分からないものである。台湾の学生は大体医者になることを第一志望とする考え方が支配的で、台北にいる母も強く希望する旨を伝えてきたが、私個人としては何も医者になる目的で高校の文科を選択したわけではないから、事志と違うということで、遺憾ながら親の意思には従わなかった。一時的方便をとらなかったことが幸いして、私の命は助かったのである。又私は大正

13年生まれなので、台湾に前後して施行された志願兵と徴兵制の適用をいずれも受けなかった。自由と自治の学園であった山口高校の軍事教育も私を強要しなかったし、学生の本分は勉学にいそむることにあると心得ていたから、特に自分から進んで兵役を志願することもしなかった。山高文科と同級生の中には朝鮮の人が二人いたが、夏休みに帰郷したきり、学園には再び顔を見せなかったのも、寧ろ異様な感じさえ受けた。

入 学

戦争末期空襲既に激しい緊張した空気の中で、挙行された4月2日の京大入学式には、学部の新入生と大学院に進んだ少数の院生に対して、羽田 亨総長の格調高い歓迎と激励の訓話があったと覚えている。入学した日は奇しくもアメリカ軍が台湾を飛び越えて日本本土の玄関口にある沖縄に上陸した4月1日エープリルフール（復活祭の日曜日）の翌日であった。日本側は当初アメリカ軍の上陸地点は台湾の公算大なりと見て、沖縄から精鋭一個師団を引き抜いて台湾に配備したといういきさつがある。若しアメリカ軍が台湾に上陸していたら、人口、幅員の大きさ、地形及び軍装備の充実度から比較して考察すると、アメリカ軍は沖縄以上の抵抗に遭遇しただろうし、勿論それだけ台湾は莫大な測り知れない犠牲を強いられたということは十分考えられる。そうなれば戦後アメリカ軍が台湾を軍事占領するという結果になって、アジアの歴史は大きく変わっていたかも知れない。

4月5日には小磯国昭総理がフィリピン防衛の捷一号作戦失敗の責任を負って総辞職、元侍従武官長、高齢79才の予備役海軍大将鈴木貫太郎に大命降下、4月7日に新内閣が成立した。

丁度その頃、私は山高先輩で京大医学部の卒業を控えて大学附属病院で実習中だった台湾出身の張興和氏の熊野神社の近くにある借家に暫時寄宿していたが、たまたま立ち寄って来られた、山高先輩で同じく京大医学部を卒業して京大病院に勤務していた黄雲裳氏が新聞の報道から察して、新内閣の人事布石は戦争の終結をさ

ぐっていると正確に判断した。戦時中厳しい言論統制で国際情勢に暗い庶民の観察の及ばない先見性があると感心した。

黄さんは教育熱心な家庭に育ち、戦前すでに山口市に移住していた。黄さんも終戦の翌年台湾に引き揚げ、台湾大学（戦前の台北帝大）附属病院の医者として勤務していたが、現状に失望、デンマークに留学、最新の脳外科医術を修得した後、日本に引き返し、日本に帰化して新島裳一と改姓名、現在は京都市左京区鹿ヶ谷に住み、医道会診病所を経営、脳外科の権威ある医者として知られている。

授業 — 短期集中講義

京都大学経済学部長は蜷川虎三先生で新進気鋭の統計学教授として定評があり、日本本土決戦になれば、何時学業が停止、学園が閉鎖されてもおかしくない最悪の状態に至った時のことを想定して、折角京大に入学してきた学生のため、一学期の短縮した時間内に一応は各主要課目担当教授の短期集中講義に接する機会があるように、特別とり計らって下さった。

旧制高校文科系学生は徴兵猶予撤廃で、在学中に約半分以上は続々赤紙を受けとって入営し、兵役に服していたから幸いにして大学に入学した者も何時自分の身にふりかかるか分からない故、学部当局の思いやりある処置に対する感謝の気持ちを皆持っていた。

谷口吉彦の「経済原論」、汐見三郎の「財政学」、小島昌太郎の「金融論」、堀江保蔵の「経済史」、堀江英一講師の「経済原書講読」、アダム・スミスの「国富論」（エドウィン、キャンパ版の抜萃が教材）等の他、特に学部長に就任して間もない蜷川虎三先生の張り切った講義は、事実を正しくとらえるために欠くべからざる批判的精神のあり方について、学生に強烈な印象を与え、半世紀以上経った現在でもその当時の教室の記憶が生々しく甦ってくる。物事に対する正しい認識と批判がなければ人間の創造力は生れず、従って社会の進歩もない。

法学部からは憲法の黒田 覚（部長を兼任、

自分は高級小使いの雑務を兼ねているようなものだと冗談を言っていたが)、行政法の渡辺宗太郎、民法の石田文次郎、商法の大隈健一郎等が経済学部の法律必修課目の講座を担当しておられた。その他刑法総論や国際公法の講義もあったようだが、記憶が確かでない。文学部からは高坂正顕が「哲学概論」の講義に来られたと覚えている。

終戦の翌年台湾に帰ってから、台湾大学法学院経済系に転校して強く感ずることは、卒業生は法学士を授与されたが、法律必修課目は京大経済学部卒業の経済学士が必修する法律課目より少なく、内容も充実していないということである。あるいは中国政府が台北帝大を接收して、まだ軌道に乗らない過渡期特有の現象であるかも知れない。

戦中一学期の学業を終了して型通りの学期末試験が行われたが、丁度「行政法」の筆記試験の際に、突然空襲警報のサイレンが鳴って、中止になったという記憶がある。

一学期の勉強を終えた後、夏季休暇期間を利用して、経済学部の学生は滋賀県での干拓事業へ勤労奉仕に動員されることになった。しかし、空襲に備えて学校を護るため、学部の新入生が5名だけ学園に残留して勉強を続ける機会を与えられた。私も幸い5名の中の1人として指定されたのは学生冥利に尽きるものと今日でも心から感謝している。自分は平凡な学生だが、あるいは学部長蜷川先生が東京下町育ちのべらんめい調で、弁舌さわやかな統計学の名講義に興味を引かれ、精神力を集中して熱心に聴講し、お陰でその課目だけ、筆記試験の成績がよかったのではないかと思う。先生の名著「統計利用に於ける基本問題」も教科書として持っていたので、一生懸命に読んで内容をよく理解できたことも、自分にとっては大分プラスになった。

一見無味乾燥な統計学を蜷川教授が講義すると、数字が生きて踊り出すという感じになるから不思議なものである。話術を心得て、時々皮肉を交えた歯切れのよい語り口は学生を惹きつける感化力を遺憾なく発揮した。

蜷川先生の基本認識は、統計が正しく理解され、且つ利用されているのかという疑問から出発している。従ってまず統計方法を理論的に研究すると共に統計利用に於ける実際に就いてその適用を示し、この現実の問題に対し、解答を与えんと試みたものであると先生は説明している。著者は大量観察に重点を置いて、一時的な現象や末稍にとらわれないように警戒している。これは経済現象の変化を観察する場合、今日の問題としても重要な意義を持っているのではないだろうか。

戦前 IT (情報技術) 産業は勿論今日見る如く長足の進歩をしていなかったが、それでも持っている統計資料が十分に利用されていたら、日中戦争が解決されず泥沼状態に陥って中国大陸に巨大な軍事力を縛られている際、新たにアメリカやイギリスを主とする強大な連合国を相手に無謀な戦争に突入するという、とり返しのつかない間違った判断はしなかったのではないか。大量観察にしっかり焦点を当てていたら、総合国力に於いて約十倍以上の開きは精神力や戦略だけではどうにも解決出来ないし、戦争が長期になればだんだん石油資源のない日本側に不利になるということは、戦争開始前既に判明していた。これは硬直的な思考という性格を持つ日本の大きな欠陥に帰するという事だけでは説明が難しい。

蜷川教授が講義で紹介されたケトラーの著名な最初の書籍「人間について」も興味をそそる統計資料が豊富であった、過去の統計資料は医者患者診断にとっても極めて大事であるから、医学部の学生が多数聴講に来ていたのは、他の学課授業には見られない情景であった。

特別講演

一学期の授業を終了する前に、蜷川学部長の招請を受けて、前年退職され、民族研究所所長になった高田保馬教授と満州建国大学の副総長(総長は満州国國務総理が兼任)を務められた作田莊一博士が特別講演をなされた。

高田保馬の講演題目は「経済学の過去、現在

と将来」約2時間であったが、全然原稿を持たないで、大きい複雑な題目を巧みに整理し、筋道を立てて、分かり易く滔滔と語る該博な学識には心から敬服し、受けた感銘が現在も強く記憶に残っている。

作田荘一は「満州建国の精神と理想」をうたった五族協和の現状並びに皇道経済の意図するところは何であるべきかを熱意を込めて説明された。作田先生はやはり、暖かい心と冷めた頭脳を兼ね備えた経済学者である。しかし、支配される立場にある満州の住民は果たしてそういう風に素直に受け止めたかどうかということは、実情を知らないので判然としなかった。只「皇道経済」という特殊な名称は学術用語としては適切でないと思ったように覚えている。満州建国以降中国東北三省の鉱業、工業特に製鉄業等が急速に成長して中国本土を圧倒する最重要地帯として建設され、その成果には見るべきものがあつたが、一方満州建国独立によって中国人の民族意識を刺激し、他方日本は国際連盟脱退に踏み切つて、遂に国際社会から孤立する路線に走り、廬溝橋の夜間演習で突発した一発の銃声で日中戦争（支那事変）を誘発し、更に日独伊三国同盟締結によって米英連合国家陣との全面衝突は避けられなくなってしまった。太平洋戦争は日本歴史始まって以来体験したことのない徹底的な敗戦に終わったが、日本にとっては今日の視野で考えると悔い及ばざる、貴重な歴史の教訓を後世に残したに過ぎない。

以上二つの学術特別講演の他に、毎日新聞の老練なる従軍報道班記者による生々しい戦場現況報告があつたが、紙面の関係で省略したい。

学園残留と勤労奉仕

一学期終了後も、幸い学園に残つた五人の学生は夏休み期間中も継続して自修の方式で学業に励む機会を与えられたことは、確かに滋賀県で勤労奉仕に出かけた他の学生に比べて、ずっと恵まれた環境にあつた。

経済学部図書館の書庫にあつた数え切れない数多くの蔵書を空襲による焼失から守るため、

より安全な場所に移動すべく、皆一列に並んでリレー式に運搬する仕事を毎日根気よくやった。ある時書庫の本棚から分厚い書籍をおろしている作業の最中、誰かのちょっとした不注意で本棚が重心を失つて、倒れかかったのを傍らに居合わせた私が目ざとく見つけて、瞬間的な反応で素早く両手を伸ばして支えたので、事故の発生を未然に防止した。これは全くとっさの間の動作だった。その時倒れる書棚の下敷になる場所で、熱心に蔵書を整理していたのは、堀江保蔵教授と二、三人の残留学生であつた。堀江先生は「よく気がついて支えてくれたので怪我人を出さなくてよかった。有り難う」とおほめの言葉をいただいたという記憶も懐しい。

空襲警報が出ると、我々残留学生は深夜でも学校にかけつけた。私はその頃学校に近い岡崎に下宿していたので、すこぶる便利であつた。空襲警報が解除されると軍隊携帯口糧の乾パンを一箱頂戴した。食糧難の時代何回かに分けて夜下宿の部屋で食用油でいためてから、口に入れて空腹をしのいだ時の舌の感触は、平和になって物資がありあまる程出廻つた今日の時代に生きる人々には到底想像がつかない。

空襲で待機している間、当直の教師同士がとり交わす雑談、例えば静岡 均助教授の呉清源名人の囲碁の布石に関する観察眼も面白く伺い知つた。徳永 清行先生は山口高商から京大に進学したお方なので、山高から来た私には親近感を持っておられた。戦後私が台湾第一商業銀行で外国部長をしていた頃、学生を引率して台北へ修学旅行に來られた時、再会して久闊を叙する機会を持ったのも古い因縁のお陰である。

戦時中の極限の耐乏生活及び本土決戦を控えての緊張した毎日を体験したということは、振り返ってみると貴重な資産になっている。「辛い思い出は年と共に色あせて行く」(Bitter memories fade away with age.)と人は言うが、全くその通りだ。アメリカ空軍の無差別爆撃と日本本土上陸作戦が目前に迫つた状態に置かれて、徳富蘇峯が盛んに天皇の大権発動による戒厳令施行を主張したが、それは結局発動される

ことなく終戦を迎えた。日本はやはり一つのまとまった文明国家であることを証明している。これは台湾がかつて長期間経験した戒厳令と比較して好い対照であり、良識ある人をして考えさせる問題でもある。

京都市は東山に誤って爆弾が一個落されただけで空襲を受けなかった。日本の古い伝統ある文化が沁み込んだ京の自然と京の人の優雅な暮らしにはぐくまれた诗情は破壊されることなく、今日に残っているのは何よりも幸いであった。「京都は日本の顔である。世界の京都である」という表現は過言ではない。

京都大学には戦争の末期に、東京都の各大学に在学していた汪精衛国民政府の中国人留學生が多数転校してきた。これは外国留學生に対する保護と集中管理（京都光華寮に寄宿）の必要性から文部省がとった特別の行政措置であったようだ。その中には東京の私立大学に在学していた学生も含まれていたから本人は喜んでいたのではないか。留學生の多くは既に中国国内で北京大学や北京師範大学等の一流大学を卒業していたから、日本人学生よりは幾らか年配だという感じがした。

台湾出身の学生は戦前中国留學生あるいは旧満州国留學生とはそれぞれ国籍が別であったし、又勿論台湾の学生は当時北京語を話せないから、お互いに話し合うとか交流するとかいうことは殆んどなかった。戦前は国籍法だけでなく、お互いに同胞だという意識がなかったというのが実情であった。戦後の今日から見るとそれを却って奇異に思う人が居るかも知れない。これは個人の自由な選択とは関係なしに、変転する歴史が決定した各人の運命として受けとめなければならない。戦後の歴史が大きく変ったからといって、誰も他人事として、当時を批判し、責めるべき性質のものではない。

多民族連合国家を形成しているアメリカ合衆国に集まった移住民族は自己の意思によって選択しているので前述のケースとは異なる面もあるが、共通する面もある。新天地を求めてアメリカに移民してその土地に住みついた人々は、

アングロ・サクソン系の英国人の子孫も含めて、新しい土地に愛着を覚え、生活環境を同じくする他民族と共通の利害関係を持つと、もともと存在しないアメリカ人（原住民はインディアン人である）という意識が強くなって共有する価値観により結ばれてくるのは自然の摂理である。

民族意識だけが強く一方的に働くと、異民族間の融和はどうしても困難になり、最終的に共通する概念たる世界市民権の確立を理想とするグローバリーゼーションは訪れて来ない。今日深く考えさせる共通の課題を、平和的にしかも好ましい方法で解決できるか否かは人類の知恵にかかっている。

ポツダム宣言受諾による終戦

昭和20年7月26日、日本に無条件降伏を迫る米、英、中三国のポツダム宣言が発表された。8月6日広島に原爆が落され、8日ソ連の回答は期待をかけていた和平仲介案ではなく対日宣戦布告、同時に待機していたソ連軍が満州に侵攻開始、更に9日長崎に原爆が投下された。戦争末期日ソ中立条約まだ有効期間中のソ連を介しての和平への努力は無駄だった。結局昭和天皇の受諾やむなしという「聖断」によって、終戦の詔書が喚発されることになった。

8月15日正午の天皇陛下の玉音放送を経済学部の教職員、残留学生一同は経済学部玄関前に並んで緊張して拝聴した。その中に立っていた私は只一人の台湾出身の在學生であったから、余計感慨無量の気持になるのは否めない。つねにそうだが戦争は始めるにたやすく、終えるに難しいということを改めて思い起こした。

日本の長い歴史には過去外国との戦争で徹底的な敗戦の経験がなかったが故に、却って禍となったという解釈も成立する。「敵を知り、己を知れば、百戦百勝危ふからず」は有名な孫子の兵法であるが、その原文は「知己知彼、百戦不殆；不知彼而知己、一勝一負；不知彼不知己、每戦必敗」で、後段の区切り「彼（敵情）判らずして己を知れば一勝一敗、相手の敵及び己たる自分にも無知であれば、戦う毎に必ず敗れ

る」は一層示唆に富んだ分かり易い言葉である。日本の庶民にもなじみが深い吉田兼好の「徒然草」にある「おのが分を知りて及ばざる時は、速やかに止むを智と言ふべし」という貴重な教訓を、日本政府と軍当局の責任者は忘れてしまったのではないかと疑いたくなる。大東亞戦争に突入したのは自衛的性格があったにしても相手が悪かった無謀な戦争であり、最後まで徹底的に戦い抜いたが、取り返しのつかない結果を招いたにすぎなかった。日本国民が払った犠牲は莫大なものであり、明治維新以来獲得した国家権益と栄光はうたかたの如く消え去った。

終戦の詔書によって始めて無条件降伏という苛酷な現実を直視した者は皆一様に無念の気持ち一杯で、声なく涙を流している人が沢山いた。その当時の情景も忘れられない。

蜷川学部長は生来性格の強いお方で、涙が自然にじみ出るのを押えながら、「これからは、苦難に満ちた長い路を歩む覚悟がなければならないが、日本人は凡てを堪え忍んで、軽挙妄動しないように、そして将来必ず再起する日を信じて一緒に奮闘しよう」という意味の簡潔な言葉で結んで学生を慰め励ましてくれた。

その後講義再開の際にも折にふれて「これで日本に対して日露戦争の仇討ちが出来た」と公言して憚らないスターリン首相を指して、時代感覚がすこしおかしいのではないかと強く非難した。終戦前後ソ連の取った非人道的な行為が随分腹に据えかねたらしい。又、拳銃自殺に失敗した東条英機元首相を評して日本の武人の本来の姿にもとると言って遠慮しなかった。更に戦争中花形であった工学部の学生から将来の職業について意見を求められたのに答えて、「そういうことは自分自身が考えるべき性質の問題である」との簡単な返事を披露された。戦争中半ばにして徴兵猶予を撤廃され、学徒出陣した文科系学生への同情心が作用しているのではないかと付度する。

終戦後の授業再開

終戦後経済学部の授業科目再編成、復活した

授業の中には静田 均の「工業経済論」、白杉庄一郎の「経済学史」、佐波宣平の「交通論」、青山秀夫の「経済原論解説」等の課目の講義が加わったような記憶がある。終戦前後を混同した課目があるかも知れない。尚佐波宣平も旧制山高出身で厳しい先生だった。ある学生に対して「出身高校はどこだ」と授業中にとがめたように覚えている。私自身がたずねられなくてほっとした。

演習の活動もいち早く開始されたが、私は中谷 実助教授担当指導の金融ゼミに編入された。将来は金融界で就職することを志していたから、丁度自分の希望と合致して嬉しかった。

最初のゼミの時間に学生がそれぞれ意見を述べさせられたが、私は「今までは善良な一日本国民として生きてきたが、日本の敗戦によって、台湾出身の人はこれからは違った国籍を取得することになる。これは個人選択の問題ではなくて、与えられた運命である。」と当時の感想を率直に言ったら、中谷先生も感慨深げに「こういう思いがけない結果を招いたのは、日本人が皆反省し、責任を持っている」という意味の発言をされた。この言葉も印象深く、何故か私の頭の中に残っている。

中谷先生が演習で取りあげたテーマは「賠償問題」で増井光蔵の著作を教科書として使用した。ゼミ参加者は輪読で要点と読後感を順番に報告し、意見を交換したが、私の当番が廻ってきた時に、台湾送還の通告を受けて、既に準備していた口頭報告は結局しなかった。

京大月曜講義の復活

終戦後間もなく、京都大学では毎月曜日の夜市民も自由に参加出来る開放された月曜講義が再開された。月曜講義は学外男女有志の聴講を可能にする「公開講座」で昭和の10年代に京大学生課長であった天野貞祐「倫理学担当教授」が、ドイツの学都ハイデルベルクに留学した大学と市民との密切なつながりを範として開放された。これは誠に「学際的」な意義ある活動で、自分も毎週欠かさず聴講し、大いに裨益すると

ころがあった。確か文学部のある教授が最初の講座で平和がやっと訪れた日本国民にとって大切な自由民主の精神に対する理解と制度確立の必要性を説明し、アメリカのリンカーン大統領が南北戦場の古戦場ゲテスバーグで国有墓地の献納に際して、戦死者を弔う有名な演説をしめくくる言葉「この国家をして、神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして人民の、人民による、人民のための政治を地上から絶滅させないためであります。」を引用された。「部分と全体」との輻湊する関係は、どちらに視点を置くかによって解釈が異なってくる非常に難しい哲学的問題である。

経験したことのない徹底的な敗戦と、受けた惨害に面して多くの国民は国家中心の思想の絶対性に疑惑を感じるが、さりとて便乗する風潮も民主社会にとって好ましい現象ではない。「戦争に負けて、男たちの背骨が折れてしまったようだ」と言って終戦直後の騒然たる世相を慨嘆されたのは京大信念の人、滝川幸辰教授であった。

戦中戦意高揚をうたって、勝算のない戦争に積極的に協力した人々のうち、今度は変身して進歩的文化人となり、戦前の日本の国民の良き面までも区別なく否定するという風潮に乗ったのを外部から眺めるとちょっと慄然とした気持ちになる。これは行き過ぎた罪悪史観ではないだろうか。

極東に位する日本が十七世紀から十九世紀中頃までとった鎖国政策から一転して開国、アジアで最初の近代化、富国強兵政策、脱亜入欧を推進した過程において、多くの錯誤を冒し、欠陥を露呈したが、他の民族にはない独特の伝統文化、例えば蕉風俳諧にみる「さび」(寂)の文化や、また現実そのものの中に浄福 (Blessedness) をみるという禅の精神等を発達させた、誇るに足る歴史を持っているという事実も忘れてはならない。

京都台湾同郷会の成立

京都地区の台湾出身学生 (入学試験などで寛

大な特典があった外国留学生の範疇には入らない) は戦後間もなく成立した台湾同郷会に殆んど全員参加したが、成立大会の際、海軍工員隊から復員した青年が真っ先に発言「京都大学と三高の台湾学生は問題なく優秀だから同郷会の理事に選出されるべきだ」と提議したので、私も別に選挙運動もしないのに皆に押し出されたような形で理事に当選した。簡単な演説を一遍だけした覚えはあるが、しかし、理事会の実際的な渉外活動に参加したことはない。

恐らく台湾同郷会が代表して、日本の関係官庁と交渉したのか、戦後急に勝利国側に立った台湾人の生活改善という名目で色々特典が与えられた。人によっては入手すこぶる困難な列車搭乗優待券を十分利用して、田舎へ貴重な食糧品の買出しに行き、町の闇市場で転売して荒かせぎをしているのもあったと聞いている。経済学部で在学していた自分にはそういう商才も働かず、又不浄の金もうけには興味がなかった。京大人の誇りはより大事で守らなければならない。

中国語の学習開始

生まれた時から、日本人としての教育をずっと受けてきた自分にとって、中国という国家は未知の世界に等しい。先ず言語、風俗習慣を含めて凡て初歩のABCから学習を始めなければならないから、大きい仕事である。大学の図書室を利用して、日本とも関係の深かった中国の国父といわれる孫文の思想を理解することを思いついて、周佛海著、犬養健訳編の『三民主義解説』(岩波新書)を閲覧、一生懸命に読んだ。圧迫された中国の自由平等を求めて一生涯奮闘した孫文の時代背景を反映した思想の骨幹は共鳴する点が多く、世人の尊敬を集めるに値するが、民族主義、民権主義、民主主義の三つの主張の内容そのものに全然問題がないわけではない。五憲民主体制を標榜する世界独特の五権分立憲法や地権平均と資本節制を中心の柱とする民主主義は、今日的視野に立てばそれ自体修正すべき幾多の缺陷があることは間違いない。

周佛海は汪精衛国民政府の要人で京大経済学部留学した日本通である。私が台湾第一商業銀行に永らく勤務した時期の同僚で且つ親しく付き合った戴時熙氏も、日本留学、鹿児島で中学で日本語を補修した後、旧第七高等学校、京大経済学部では、周佛海氏と同級生の間柄であったという。戴さんは数年前99才の長寿で永眠された典型的な人格者であった。大陸時代には若くして北京大学教授や幾つかの県長を歴任されたこともあるが、金銭には至って淡泊、清廉な人間で、中国の官吏には珍しい存在であり、少年の頃憧れた日本に留学するため、故郷雲南省の片田舎塩津から徒歩で二晩三日幾つもの山を越えて、県庁所在地の昭通に辿りつき、それから昆明、上海経由で船に乗って日本に渡ったという気が遠くなるような苦勞した話を聞かしてもらった。日本の遣唐使を逆に行ったようなものである。奥様は同志社大学卒業の留学生、ご息子は清華大学卒業後早稲田大学「都市環境室」で四年間研究、孫も現在日本留学中という。戦後中国大陸から台湾に移住した数少ない知日一家である。

日清戦争を経て、日本が勝者となった日露戦争後の時代には、欧米留学よりも日本留学が寧ろ中国青年の憧れの的であったし、1905年日本で結成された中国革命同盟会には多数の中国留学生が入り、清朝打倒の原動力となった。広州の「黄花岗の役」の72烈士の中心的存在は日本に在学中の中国留学生であった。日本としても深く考えさせられる歴史の事実である。京大文学部が戦後間もない頃、時代の要請に応じて開設した「中国語講座」にも積極的に参加した。講師は貝塚茂樹が吉川幸次郎どっちだったか、はっきり記憶していないが、唐時代の著名な詩人孟浩然の「春暁」を教材にして明瞭な発音で朗読された。

春 暁

(孟浩然)

春眠不覚暁，處處聞啼鳥。

夜來風雨聲，花落知多少。

意識すれば「春の夜は短かく、又風や雨の音で眠りは浅く、睡眠について間もなく、至る處に鳴く鳥の声で思わず目が覚める。昨夜来の風と雨の音を思い出すと花がどれだけ散ったかが、気になる」。この小さな詩はたった四句二十字だが、作詩した浩然是聴覚に訴えて自然の風情を描写した。芸術的な魅力は華麗な辞句でなくて、朗読して平易自然な韻文にある。千百年來、人々は誦み伝えて、汲み切れない芸術の宝が秘められているというも宜なるかなである。

「春眠暁を覚えず」という題の浩然の小さな詩は遍く日本人にも親しまれ、人口に膾炙され今日に至っている。人類共通の貴重な資産である。聴講者の中には、戦前台湾人で唯一人、日本内地の官立高校、旧制第三高等学校で数学を教えていた施拱星教授の姿も見えた。

日中文化の交流と文字とのかかわり

京都の台湾同郷会でも特に京大在学中の中国留学生を講師に招いて「北京語講習会」を開いた。中国留学生講師が最初の講習の時間に「日本人は漢文を読むのに訓読みで、送り仮名、送り点を巧みに使用した日本語発音の読み方は理解に苦しむ。これでは中国民衆との幅広い意思疎通は難しい、言語は意思疎通の道具であるから、相手に通じる話し言葉でなければ、目的が達せられない。中国人が日本文化を理解するために、日本語を勉強すると同様に、中国人と意思疎通のためには努めて中国人が理解出来る話し言葉を勉強するように努めるという心がけがあつてこそ、相互理解の道が開いて、誤解が少なくなるのではないかと思う」と。確かに一理ある見解であるが、私は日本語が中国の象形文字（表意文字）である漢字を輸入してから、音読の他に訓読みと併せて発音を表現するのに片仮名と平仮名という音標文字を発明したのは偉大な進歩であり、そのことは「人類の文字は象形文字から音標文字へと進む、それが文字の進歩であるという。言語と文字における発展史観を先取りしたもの」ではないかと考えている。

これは日本が欧米文明の近代科学を吸収する

のに、漢字しか持たない中国に比して遥かに便利であったという過去の事実がよく証明している。仮名遣いは表音的な性格を持ち、いずれも万葉仮名から作り出されたもので、平安時代に入ってもなく（西暦九世紀に中頃）発明された平仮名、片仮名は日本独自の文字であった。これは日本人の創造性をしめしている。中国は漢字という象形文字しかないものだから、人名や地名の固有名詞や科学術語を漢字で表現する場合、当て字を探すのに苦勞するばかりでなく、統一した標示の文字が確立されていない。北京、上海、広東、福建と地方によって発音も違うので、標示文字の統一が一層困難である。魯迅が「漢字が減びなければ、中国が亡びる」とまで言ったのは、言い過ぎであったにしても、漢字文化圏が抱えている欧米文化吸収の不便を指摘している。

日本においても嘗て日本語廃止、英語採用論あるいは漢字を廃止してローマ字を採用せよという主張乃至は勸告論があったが、米国の学者ホイットニーが文部大臣森有礼の手紙に対する返事で「言語はその種族の魂と直接に結びついたものであるから、そう安易に放棄するなど言ってはならない」と忠告しているのは正しい。

更に言語の普及は文化的要素以外に、国力の消長とも密切に併行しているという関係にある。これは、日露戦争勝利の後あるいは大東亞戦争の初期日本が赫々たる戦果をあげていた時期、東南アジアに於ける日本語の普及と、それに第二次大戦後勝利国を代表する英米語が急速に普及して今日に及んでいる事情を見れば判り易い。

戦後転校に至る経緯

戦時日本内地の極端な食糧不足情勢を少しでも緩和するため、文部省から通達があつて、各帝大間で故郷に近い帝大への転校申請を受理したが、私の知る範囲内では京大から東大を志願するという話しも格別耳には入らなかった。やはり自分の当初選択した学校に愛着を感じ、誇りに思うという気持ちが強いのだろうか。何事も打算的に考える中国人だったら、異なった選

択の行動をとったかも知れない。勿論日本人の中には例外的に逆の行動をした学生がいる。例えば、旧制山口高等学校文科の同級生三瀬信雄君は家が長岡京市にあった関係で、勉強の便宜を考えて、東京大学法学部から京都大学法学部に転校した。そしてその後勇敢にも京大総長公邸で書生修養を希望して、暫く寄宿を許可してもらったという。三瀬君は高校同級生の中では豪傑肌の人で河上肇夫人をよく存じ上げたという。河上教授は旧制山口高等学校の前身たる旧山高卒業の大先輩だったという関係からであると推測する。

河上先生が1917年に出版された有名な『貧乏物語』の全体を貫く精神は「人はパンのみにて生くものにあらず、されどまたパンなくして人は生くものにあらず。」であり、今まで出版した最高の作品だと本人も自認している。貧困の解消が依然として現在でも経済学の切実な問題であり、宇沢弘文が『経済学の考え方』（岩波新書）の中で日本では経済学の入門書としてもっとも優れた書物の一つにあげて絶賛している。

明治維新の発祥地である山口は、又京都学派を代表する西田幾多郎博士が明治30年から2年間旧山高で教鞭を執ったことのあるゆかりの土地である。

終戦になって学徒出陣していた学生もだんだん復員して学園に戻って来たし、授業も再会されて活気を呈するようになったが、京大経済学部に大きな人事改革の動きが底に流れているということは、不肖なる私には全然情報が入らなかった。

戦後続々復員してくる軍人軍属と海外に進出していた日本人が一斉に国土が狭くなった日本内地へ引き揚げてくるので、食糧不足の情勢はもっと悪化することが予想されていたから、日本政府も食糧事情緩和の政策として、又日本を占領していたマッカーサー軍司令部も台湾の人が可及的に早く故郷に帰ることを奨励する方針をとっていた。マッカーサー軍司令部の通告で宇品から日本の改装した駆逐艦に乗ったのは終戦半年余り経った後の昭和21年2月21日で

あった。

思えば熾烈を極めた戦争のさなか、昭和18年2月初め、アメリカ潜水艦が既に出没する内台航路海域の危険を冒して、進学だけが目的で日本内地に渡り、戦争中山口と京都に住みついた私は、台湾へはもう帰れないのではないかと真剣に考えていた時期があった。勿論そう考えること自体私は素朴であったが、当時東条首相は新聞記者の質問に答えて「百年戦争の覚悟だ」と真面目に言明していたから、単純に笑えない。戦争の勝敗の結果がどうであれ、最終的には時間が一切を解決する。日本内地滞在中、台湾へ帰れなかった私は学校休暇、学寮閉鎖の際には、秋田鉦専を卒業して帝国鉦業開発会社の鉦山長を勤めていた叔父の家（四国の八幡浜と移転した九州の都城にあった）で随分お世話になった。

未来予定説を私は必ずしも信じないが、学業半ばにして京大経済学部から転校するということは、台湾で専門学校無試験入学の特典があったのに、それを放棄して、日本内地の進学に挑戦したといういきさつがあるから、夢にも考えていなかった。かつて自由主義者、河合栄治郎教授は昭和13年に工業クラブで講演し、「このままゆけば、日米衝突は必至であり、その結果、日本は朝鮮、台湾、沖縄を失うだろう」と予見した歴史の進行が現実のものになったので感無量であった。

私は事前に学部の学生課に正式に届け出て、暫時帰台すると言ったら「経済学を勉強するなら、やはり京大の条件が勝れている。惜しいけれど、残念だね」という返答で、書類を受け取って下さった。

戦前の台湾の学生にとって、中国語の学習も凡て初歩からやり始めなければならない。若し私が理科系の学生であったならば、卒業まで京大で勉学を続けていたであろう。終戦後日台間の一般通信は途絶していたから、台湾の事情は皆目判然としない。大学付近の吉田の下宿（家主は偶然戦前台湾の東海岸に移住して農業を営んでいた）を引き払う前に今までもらった特配の酒、煙草や食糧等の貴重品は凡て、金融ゼ

ミの指導教授中谷先生へのお礼の寸志として、小倉町でお住まいのお宅へ別れの挨拶に参上した際差し上げた。先生は遠慮して受け取るのを躊躇しておられたが、台湾に引き揚げる事情を説明し、納得していただいた。自分の感謝の気持ちは到底僅かな物品では表すことができない。

台湾に帰ってからもずっとまめに文通（日本占領期間中、検閲の捺印があり）を続け、その都度必ず励ましのご返事を頂いたが、やっと再会の機会が訪れてきたのは、お別れしてから約15年余り闊した後、私が台湾第一商業銀行本店業務部企画科長として三和銀行へ半年間研修出張を命ぜられ、休日を利用して覚えのあるお宅へお伺いした時である。大阪に本店がある三和銀行には京大中谷金融ゼミ参加の卒業生が沢山いたから、何名か主だった方に紹介状を書いていただき、格別の面倒を見てもらった。中谷先生がお亡くなりになられた後、私は奥様を表敬訪問、おくやみを申しあげ、故中谷先生の霊前に恭しく合掌してご冥福を祈った。生前、始終温厚で、ゼミの学生に対しても優しく、自主性を尊重して指導された中谷先生の懐かしい面影が自然臉に浮かんできた。

む す び

私が京大経済学部在学中、蜷川虎三先生はずっと経済学部長であった。その蜷川先生は敗戦を契機に戦争中学問の自由を守る努力が足りなかったという反省と、学部長としての責任を感じて、教授会の席上で、退官の意を表明され、部長より先輩の教授も皆それに従ったのが21年2月19日、私が日本を離れて台湾に帰る2日前のことであった。これは日本が新しく出発するための人事刷新を表徴する京大経済学部教授の総退陣に発展した。

蜷川先生は戦時中勤労働員で宇治の火薬廠に出かけて危険な仕事についていた学生の安全を慮り、現場監督の軍の指揮官と強く掛け合って、琵琶湖の埋め立て工事に移したいいきさつがある。又京都府知事に連続7期当選して28年間庶民の暮らしを何よりも大事に考えて行動する革新政

治を推進し、行政職人を実践した。ずっと借家住まい、清貧に甘んじて、潔白の一生を終えたということは、よく常人のなし得る業ではない。

蜷川先生が京大を去ったのは、政治の浄化にはプラスになったが、教育界の大きな損失であったと思う。

国家の運命の岐路に立つ決断の大事な時に、

距離を置いて冷静に批判する立場から大量観察して、大勇を持ってリーダーシップを発揮出来る達識の士が、日本の政府・軍部の中枢に欠けていたことは不幸であったし、実に多数の人の運命を変えたことを痛切に感じる。

良心に従って勇気ある行動をとられた蜷川虎三先生は、私の目に映じた大きな存在である。